

《資料》

実験的メセナの実施報告 その3

菅 家 正 瑞

(長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」代表)

1. はじめに

本研究会は昨年(平成20年11月5日(水)から7日(金)), 実験的に第3回目の「メセナ」(mécénat)^(注1)を実施した。「企業メセナ」の研究にあたって、その実体・内容を模擬体験することは今後の研究に有意義であろうと研究会の発足時から考えたからである。その結果については、いわば「アカデミック・メセナ」として既に報告している^(注2)。平成20年度も引き続き実験的にメセナ実施したが、前回(第二回)と異なるのは、前回は集客に失敗したことから、日程を慎重に定め、集客に工夫を加えたこと、地元長崎在住の演奏家との共演とし演奏家を二人に絞ったこと、音楽ホールなどでの演奏会を実施したこと、などである。

本来「企業メセナ」とは、実施企業の必要性に基づき、その内面的要請として実施されるものである^(注3)。したがって、それは、企業自身が計画し、資金を拠出し、実施し、評価して次回のメセナに生かしていくものである。しかし、メセナという言葉さえ一般市民はもとより、企業経営者にも知られていることが未だに少ない長崎で、一挙に本格的企業メセナを期待するのは無理というものであろう。まずは啓蒙活動的に実施し、その必要性を少しずつ関係者に理解して頂くことが必要であると思われる。

「企業メセナ」について、少しずつ企業や市民に浸透し始めたようである。今年度は、どのようにメセナが実施され、その成果はどうであっただろうか？新しい工夫は実を結んだであろうか？先に結論的に言えば、今回は成功と失

取のモザイク画であった、と言えるであろう。その経緯を報告することは、スポンサー企業へのアカウントビリティでもある。ここに本報告書を公表する所以の一つがある。

注1：メセナとは芸術文化支援を意味するフランス語である。古代ローマ帝国の初代皇帝「アウグストゥス」の右腕と言われた「マエケナス」(Maecenas)が芸術や文化を手厚く擁護したことから、その名をとって「芸術文化を擁護、支援すること」をメセナと言うようになった。

(社)企業メセナ協議会(編),『メセナマネジメント』,ダイヤモンド社,2003年,245頁参照。

注2：拙稿,「実験的メセナの実施報告」,『経営と経済』,長崎大学経済学会,第86巻第3号,2006年12月,225頁以下参照。

拙稿,「実験的メセナの実施報告」その2,『経営と経済』,長崎大学経済学会,第87巻第3号,2007年12月,193頁以下参照。

注3：「企業メセナ」と「企業管理」との関連については,拙著,『環境管理の成立』,千倉書房,2006年,特に,第1章 環境管理の成立,第6章 環境志向の市民化管理,を参照されたい。

2. 経 緯

(1) 実施決定までのいきさつ

これまでの報告書と同じく、今回もはじめに「メセナ」の実施に至った経緯について簡単に述べる。最初のメセナの経緯については2005年の報告書をご覧頂きたいが、きっかけは単なる演奏会の実施の打診であった。メセナ活動は初めての経験であったので、その経緯は試行錯誤の連続であった。時間的余裕もなかったので、資金も企業メセナ研究会への寄付金をあてた。「アカデミック・メセナ」と述べた所以である。昨年は初回の経験を生かす事が出来たし、時間的余裕もあったので、本格的な「企業メセナ」の実施を目指した。また、同時に大室晃子氏(以下大室と言う)^{注1)}のピアノだけではな

く、チェロとヴァイオリンを加えたピアノトリオを実施した。共演者であるチェロ奏者は、著者の旧来の友人である元日本フィル首席奏者であった奈切敏郎氏、ヴァイオリンは本学教育学部の加納暁子准教授(以下加納と言う)^(注2)であった。問題は、演奏者も増えたし、ホールも借りたので、どのようなスポンサーに協力して頂けるか、必要な資金が集まるかどうかであったが、なんとか資金的には間に合った。

今回は、前回の財務的困難性に懲りたこともあって、上述のように大室と加納による二重奏を中心とするプログラムとした。テーマは「フランスのエスプリをあなたに」とし、プログラムもフランス音楽を中心に組んだ。

注1：大室の略歴は以下の通り。

東京生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京芸術大学、同大学院を経て渡独。フライブルク音楽大学、シュトゥットゥガルト音楽大学大学院ソリスト課程を首席で修了し、国家演奏家資格を最優秀の成績で取得。マルサラ市国際ピアノコンクール(イタリア)、ウエスカ市国際ピアノコンクール(スペイン)などの国際コンクールで入選し、シュトゥットゥガルト音楽大学で教鞭をとる。現在日本とヨーロッパ各地でソリストとしてのみならず、室内楽奏者、歌曲伴奏者としても活躍。また、20世紀を代表するヴァイオリニスト、ユードィ・メニューインの創設したヨーロッパのNPO団体「Live Music Now」所属ピアニストとして、社会と音楽のかかわりに強い関心を持ち、アウトリーチ活動も積極的に行っている。現在、東京芸術大学非常勤講師。

注2：加納の略歴は以下の通り。

神戸女学院大学音楽学部音楽学科卒業、クラブファンタジー賞受賞。同大学音楽専攻科修了後、大阪教育大学大学院音楽教育専攻器楽専修を修了し、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所博士課程修了。神戸女学院大学新人演奏会、関西新人演奏会、朝日推薦演奏会、阪神淡路復興支援チャリティーコンサートなどに出演。2006年、長崎にてソロリサイトを開催。文化庁芸術家等派遣事業を通して、長崎県内の小、中学校など、各地においてコンサートを行っている。故古武滋野、稲垣琢磨、辻井淳の各氏に師事。現在、長崎大学教育学部准教授、活水女子大学音楽学部非常勤講師、ジュニアオーケストラながさき講師。

1, 2回目は、当然ながらこの演奏会を地元企業単独による「企業メセナ」

として実施できないか、と考え、いくつかの長崎の地元企業あるいは事業所に持ちかけたが、結局引き受け手は見つからなかった。その理由は様々であるが、交渉の際に感じた大きな理由としては、長崎経済が依然として停滞気味であること、企業や事業所にとって年度の予算外の事業であること、本企画が各企業の支援理念に必ずしも合致しないこと、「企業メセナ」に関してまだ十分な理解や必要性が広まっていないこと^(注3)、などが考えられた。今回においても、上記の理由についてはあまり変化は無いように感じられたが、「企業メセナ」についての認識は少しは浸透しつつある兆候が見られるようになった。

なお、地元企業ではないが長崎に支店や事業所を持つ大手企業では、「企業メセナ」についての知識を持ちその意義についても良く理解しているように思われた。また、文化・芸術について強い興味を持ち、何らかのメセナの活動をしている経営者にも遭遇し得たことは、少し落ち込んでいた筆者に勇気を与えてくれた。この場を借りて彼等に厚くお礼申し上げる。

注3：この点については後で簡単に触れるが、筆者の講義において（「経営管理論」を昼間コースと夜間主コースで開講、受講生は50～80名程度）「企業メセナ」について尋ねたところ、その名称を知っている者は最初は皆無であったが、少しずつ増大しているようである。また、地元企業の関係者にも、「企業メセナ」を認識している人たちが増えているようである。

今回も昨年度に引き続き、本企画を「企業メセナ」として実施することにしたので、スポンサー企業を見つけることは必要最小限の条件である。また演奏家を2人に減らしたといっても、資金的問題の困難性は同じであった。昨年度と同様に無理を言って出演料を大幅にダウンして頂いたので、スポンサー企業探しは不可欠であると同時に、本企画の本質的な問題になってしまっている。結果としては、スポンサー企業は何とか集めることができたが、資金的にはぎりぎりでかなり苦労した。資金を提供して頂いた、「福砂屋」、「ラッキー自動車」、「橋本商会」、「長崎自動車」、「三菱重工長崎造船所」、

「十八銀行」、「みずほ銀行長崎支店」様には深く感謝します。

(2) 実施内容の決定

テーマの決定

昨年に引き続き、今年度のメセナのメインテーマは「大好きな長崎への音楽のプレゼント」とし、その第3弾とした。さらに、サブテーマとして「フランスのエスプリをあなたに」^(注4)とし、フランス音楽を中心にプログラムを組み、本メセナのコンセプトを明確にした。その位置づけは、従来と同じく本格的企業メセナへの橋渡しとする。これまでの報告書で述べたように、大室は長崎という街に惹かれ、以前より長崎でのコンサートの実現を希望していた^(注5)ので、演奏者の意向を尊重し、初めからメインテーマは「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」と設定していた。もちろん、その趣旨から今年度もコンサートは無料とする。また、大室は長崎における本格的コンサートは初めてという新人でもあったので、長崎を愛するピアニストの紹介をも兼ね、長崎を活動拠点の一つにしたいと願っている意志実現の第一歩とすることとしたのである。

要約すれば、このテーマは、前回に引き続き、1)長崎における企業メセナの普及・啓蒙、2)有望な音楽家への支援、3)良質な音楽の提供、に絞られるが、今年度の具体的目標は、1)についてはスポンサー企業の発掘、2)3)についてはピアノ独奏に加えてヴァイオリンとの二重奏という演奏領域の拡大、となったのである。

注4：昨年度のサブテーマは、「ライブツィツィを愛した音楽家達」で、バッハとメンデルスゾーンの曲を採り上げ、バッハによるピアノ、ヴァイオリン、チェロの無伴奏曲とメンデルスゾーンのパiano三重奏を演奏した。

注5：大室は自分自身で述べているように「遠藤周作」の大ファンであり、特に『沈黙』の舞台となった長崎（外海地区）に強く惹かれていた。第1回のプロジェクトでは、彼女の意向を汲んで外海地区の黒崎東小学校（校長：樽美寛）を訪問演奏している。なお、外海地区には「遠藤周作文学館」が2000年に設立されている。

1) スポンサー企業の発掘：実務的にはこれが最大の難関であった。その趣旨からしてスポンサーは長崎を代表する、あるいは長崎経済をリードする地元企業が望ましい。さらに、いきなり地元企業のみで出発するのは困難に思われたので、企業メセナについてその趣旨を良く理解し、立派なメセナ活動を展開している日本を代表する企業の協力も不可欠であろう。そこで、まず大企業で長崎に事業所を持つ幾つかの企業と交渉したがなかなか快諾が得られず、途方に暮れたことがしばしばであった。しかし、幾つかの縁や偶然が重なり、「三菱重工」と「みずほ銀行」の協力が得られることとなった。

地元企業に関しては、長崎経済界を見渡し上述した条件に相応する企業に絞り交渉を重ねたが、快諾・即決して頂いた企業もあったが、多くの企業についてはいろいろな阻害要因が横たわり、交渉は困難を極めた。結果として、所期の目的にそったスポンサーを得ることが出来たと考えている。何とかすれば赤字を出さない程度の資金を得ることができた、と思われた。

2) ヴァイオリンについては、長崎大学教育学部の加納准教授に前回参加して頂いていたので、今回も彼女に御願いすることとした。時期的に非常に忙しいはずであるが、快く承諾して頂いた。ついでながら、我が研究会にもご参加願うこととなった。

問題は曲目である。ピアノとヴァイオリンのための名曲は沢山あるが、どの曲が本プロジェクトの趣旨に合うだろうか。山のような曲目から選ぶのは至難の業である。実は、メインの曲目は、本プロジェクトの責任者である私の希望を取り入れてもらった。30年以上も前の話であるが、FMのクラシック音楽放送のチェックに凝っていた頃、フランクのヴァイオリン・ソナタを聴いてとても感激した思い出があった。是非、この名曲を生演奏で聴きたいと思っていたのである。次に、サブメイン曲の決定であるが、これについてはピアノ独奏を担当する大室に決めてもらった。

3 . コンサートの実施

(1) コンサートの準備

演奏会場とスポンサー企業が決まったので、コンサートのための準備活動を開始した。前回の集客の失敗を反省し、コンサートの時期と集客方法に少し工夫を凝らした。

時期：コンサート期間は平成20年11月5日（水）から11月7日（金）の三日間とした。これは、「おくんち」^(注1)が終わっていること、小学校での演奏は体育館を使用するので暑くも寒くもない頃が望ましいこと、「長崎音楽祭」^(注2)も終了しており、12月は沢山の演奏会が予定されているが11月はその狭間であること、などの理由から決定した。

注1：長崎の諏訪神社に各町が奉納する、毎年10月7日～9日にかけて開催される全国的に有名な秋の大祭。

注2：平成19年から、長崎県の主導によって始まった地元音楽家を中心とする音楽祭。加納はこの音楽祭のために結成された記念オーケストラのコンサート・ミストレスを務めた。

チラシの作成：チラシについては、次頁の図のように、フランスのパリの象徴である凱旋門をバックにし、「『良き企業市民』をめざして」というコピーの下にスポンサー企業名を載せ、企業メセナのイメージを出すようにデザインした。



表 裏 作成したチラシ

(裏面の花の絵は長崎県地域経済研究所の理事長である脇田氏の筆によるものである)

特別招待券の作成と配付：前はスポンサー企業にチラシを寄付金額の按分比例方式で配付しただけであったが、あまり効果が見受けられなかったので無料の「特別招待券」を作り、チラシと一緒に配付した。また、市内3箇所のプレイガイドにチラシと招待券を100部ずつ置いてもらっ

大好きな長崎へ音楽のプレゼント 第3弾
 大室晃子ピアノ・コンサート
 共演 加納暁子(ヴァイオリン)
 ～フランスのエスプリをあなたに～
特別招待券

下記のコンサートにはこの券をご持参ください。

- ・ 県美術館ロビー・コンサート (11月5日(休)、午後6時開場、6時30分開演)、先着60名様まで椅子席をご用意いたしております。
- ・ ピアノとヴァイオリンの夕べ (11月7日(金)、午後6時半開場、7時開演、チトセピア・ホール)、先着500名様までご入場できます。

新たに作成した特別招待券

た。その外に、幾つかの音楽会場や後援企業にも相当枚数を配付した。コンサートが近づくにつれて、プレイガイドの招待券は次第に無くなり、完全に無くなった所もあった。

(2) メセナの開始

1) 福祉施設「みのり園」でのアウトリーチ・コンサート

次に、このテーマに沿ったコンサートをどのように設定するか、が問題となる。社会的弱者に対して何らかの貢献をすることは、市民としての義務であろう。本プロジェクトは初めから何らかの福祉施設での演奏を企画していたが、いろんな理由で実現できなかった。今回初めて「みのり園」という施設でコンサートを実現できたことは、私にとってやっと借金を返済できたような気持ちであった。曲目は、ショパンの子犬のワルツ、フランクのヴァイオリン・ソナタ第一楽章、などであった。子供達が演奏をどのように聴くのか、途中で騒ぎ出すのではないか、など心配をしたが、それは杞憂に終わった。ただ、残念なことは、ピアノが調律されていないことであった。ピアノはどうしようもないが、ヴァイオリンは音程を合わせるのに苦労したことがある。

「みのり園」のコメント：

先日は、素晴らしい音楽をありがとうございました。普段、コンサート会場に足を運ぶことの難しい私達ですが、今回、このような形で生の演奏に触れることができ、利用者・職員一同、大変素敵な時間を過ごすことができました。

耳慣れないクラシック音楽ではありましたが、普段落ち着いて過ごすことの難しい入園者が、その場にじっと坐って流れてくる音楽に耳を傾けていたり、また、知らない曲でありながらも、その音楽に合わせて拍を刻んだり、身体を揺らしたりと、各々が思い思いに音楽を楽しむことができ、優しい音色は自然と人の耳の中・心の中に浸透していくものなのだ改めて実感しま

した。またピアノの鍵盤上を自由に動く指先や、バイオリンの弦捌きを間近で見ることができ、一心に見つめる入園者も見受けられ、楽器の仕組みや演奏に対する興味が引き出されたように思います。

バイオリン・ピアノのソロ演奏は言うまでもなく、2つの楽器の掛け合いがとても素晴らしく、双方の楽器が本当に会話をしているように感じられました。また一つの楽器が演奏方法一つで研ぎ澄まされた音色や優しい音色等様々な音が奏でられ、曲調によって軽快であったり、優美であったり、時には物悲しかったりと表現の仕方で表情が変わる音楽に、人間の自己表現と似たところがあるように感じました。

また皆様にお目にかかれる日を心待ちにしております。



みのり園でのコンサート風景

2) 長崎県美術館における「ロビー・コンサート」

平成17年(2005年)に開館した県美術館は、新設された長崎歴史文化博物館と並んで、文化・芸術の東京一極集中化ともいえる中で、長崎らしさを具現

化した本格的な美術館^(注3)と博物館である。本県は、これらの施設によってやっと本来の文化・芸術の拠点を持ち得たと言えるかも知れない。それはさておき、本美術館では催し物の一環として以前から一定レベルの演奏者にエントランス・ロビーを開放して「ロビー・コンサート」を実施している。そこで、今年度も美術館館に申し入れたところ問題なく承認され、コンサートの運営はほとんど美術館側で行って頂いた。これは、最終日の本格的なピアノデュオ・コンサートの序奏となるものである。このコンサートの担当者であった広報担当館員の建石久美子さんに深く感謝したい。

注3：本美術館は（株）日本設計 隈研吾氏 の設計になるもので平成17年4月に開館し、館全体をガラス張りとしたユニークな建物である。今回、「須磨コレクション」の展示や調査研究活動等について、スペイン政府他により組織する団体「カーサ アシア」よりスペイン文化普及に大きな功績をしたと認められ、平成18年「カーサ アシア賞」を受賞した。



長崎県美術館でのコンサート風景

聴衆：着席約70名、立見約10名 合計約80名

共催者コメント（長崎県美術館 建石 久美子）：

開館年から連続の開催で、今年で3回目を迎えました。一昨年はピアノソロ、昨年はピアノトリオ、そして今年はデュオ、とすることで毎年編成が変わることも楽しみの一つです。今年は、整理券を事前に配布して頂いたおかげで満席になりました。また、開場前から並ばれるお客様がいるなど、3年目の大室晃子さんの人気が伺えます。

プログラムは、「月の光」「タイスの瞑想曲」など聴きやすい曲から、フランクの「ヴァイオリンソナタ全楽章」と言った本格的な曲まで、美術館のロビーコンサートならではの気軽かつ上質の音楽が溢れるコンサートでした。

また、美術館はすばらしい世界の美術が溢れていますが、カフェやショップ・屋上庭園などでも、五感を使って楽しむことができるのも美術館ならではのです。音楽だけでなく、様々な芸術を感じて頂けたら幸いです。

今年も、管家先生を始め、ピアニスト大室さん、バイオリニスト加納さん、そして協力頂いた企業の皆様に改めて御礼を申し上げたいと思います。

アンケート調査の結果と分析：54件（約80名中）

今回、美術館でのコンサートが2回目以上の方が約40%もいたことは、美術館コンサートが年々定着してきていることが伺えます。また、属性に関して年齢比率を見てみると、通常のロビーコンサートは若い世代の方が少ないのに対して、10代から70代までほぼ全ての世代に来ていただいたことは嬉しいことです。普段は足を運ぶことがない方たち（例えば、小さな子どもがいるお母さん、クラシック音楽のコンサートにあまり行かない方、行ったことがない方など）に、美術館で気軽に音楽に触れて頂くきっかけとなるロビーコンサートが続けていければと思います。

3) 時津北小学校での「アウトリーチ・コンサート」^(注4)

前回と同様に、今回も小学校におけるアウトリーチ・コンサートを企画し

た。小学校は、第1回目に訪問した黒崎東小学校の樽美校長が時津北小学校に転任されたことを知り、前校で非常に熱心にかつ適切に対応して頂いたことから、時津北小学校で行うことにした。時津町はいわば長崎市のベッドタウンであり、カナリー・ホールという立派な施設も持っているが、小学生にとってはまだまだ生の音楽を聴く機会に恵まれている、とは言えないだろう。ここもまた、前回の福田小学校と同じように、都会の空気と田舎の空気が混ざり合った地域である。

本物の生の音楽に触れる機会がない子供達に、このような機会を提供することはとても有意義なことであり、その中から一人でも多くが音楽に興味を持ち、音楽が好きになってくれる人達が増えることは、社会にとっても個人にとっても生活を豊かにすることに繋がることであろう。

注4：「アウトリーチ」(outreach)とは、一般の人々に芸術に対する潜在的なニーズや関心を喚起することで、芸術文化に関わる人々の「関係者の枠」を出て、日頃あまり芸術に触れる機会がない人や、関心がない人々に対して、なんらかの働きかけを行うことである。

(社)企業メセナ協議会編、『上掲書』、239頁参照。



時津北小学校でのコンサート風景

樽美校長のコメント：

本校は心と体を育てる健康教育に取り組んでおり、今回のコンサートはとても有意義なものであり、児童・教職員ともこの日を楽しみにしていました。体育館での演奏で演奏者の大室さん、加納さんは大変だったろうと思いますが、私たちは感動と喜びの中に楽しい時間を過ごすことが出来ました。本物の生の音楽に触れることが出来たことを感謝いたします。教職員も「よかったね。」「やっぱり本物はいいね。」「生の音楽にふれるのはいいですね。」と話していました。子ども達は「また来てもらいたい。」「すごかった。感動しました。」など、間近で聴けたことがとても新鮮で思い出になったようです。演奏者の優しい人柄に触れることができ、子ども達も大変喜んでいました。機会がありましたら子ども達にまた、演奏を聴かせてあげてください。菅家先生、大室さん、加納さんに素晴らしい時間を頂いたことに感謝いたします。

4) 長崎大学医学部・歯学部付属病院での「ロビー・コンサート」

本年度も昨年と同じく、大学の付属病院で「ロビー・コンサート」を企画した。昨年とは違った病院も候補に挙がったが、条件が折り合わず昨年同様に大学病院での実施となった。幸い、病院には「患者サービス課」が設置されているので、このコンサートは学長および病院長の承認の下に全面的に患者サービス課に担当して頂いた。付属病院は改装中で、幸いロビーは既に完成しており、全面ガラス張りの明るくて快適な空間に生まれ変わっていた。演奏する側も聴衆側も、極めて恵まれた環境であった。入院患者の中には比較的元気で時間も余裕のある人たちや、コンサートを聴くことが可能な患者もいる。そのような患者さんに、生の音楽を聴いてもらうことは「音楽療法」という言葉があるように、病気やケガの回復に役立つことができるといわれている。「音楽の力」は思った以上に大きいのである。このロビー・コンサートでは、坂口課長を始め患者サービス課および「輔仁会」に大変お世話になった。厚くお礼申し上げる。

なお、このコンサートの模様は学内広報誌である「CHOHO」に掲載された。(注5)



付属病院でのロビー・コンサート風景

患者サービス課からの報告：

主催：長崎大学医学部・歯学部附属病院

長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」

協賛：財団法人 輔仁会

日時：平成20年11月6日（木）17:30～18:00

場所：長崎大学医学部・歯学部附属病院 1Fコリドール

聴衆：入院患者約110名，職員約20名，計約130名

プログラム：華麗なるワルツ（ショパン），タイースの瞑想曲（マスネ），愛の喜び（クライスラー），月の光（ドビュッシー），ヴァイオリンソナタ 第4楽章（フランク）

当課はチラシ・ポスターを作成し，各病棟，各診療科，各中央診療施設，

事務部等に配布し、院内放送を行うなど、聴衆者を募った。当日は、曲名の入ったプログラム及び演奏者のプロフィールを配布し、お集まりいただいた患者に楽しんでいただいた。

主催者側のコメント：入院している患者にとって生の演奏を聴く機会は限られており、たいへん喜んでいただいた。菅家先生、大室晃子さん、加納暁子さんに、このようなすばらしい時間をいただきことに感謝します。

注6：長崎大学、『CHOHO』、第26号、2009年1月、19頁参照。

5)「チトセピア・ホール」^(注7)でのコンサート

これは、以上の一連の活動を最後に締めくくる本格的なコンサートであり、本格的な企業メセナの第一歩、長崎への音楽のプレゼント、長崎への新人演奏家の紹介と育成、という本企画の3つの目的を一本化し、収斂させた本企画のメイン・イベントの一つと位置づけられ得るものである。したがって、プログラムも既述したように練りに練ったし、演奏者も本コンサートに向かって磨きを掛けてきたはずである。チラシも、このコンサートに焦点を合わせて作成した。したがって、一連の本企画が成功するか否かの評価は、このコンサートに懸かっているとと言っても過言ではない。プログラムは次頁の通り。

大室英子 大好きな長崎へ音楽のプレゼント 第3弾

ピアノとヴァイオリンのタベ

—フランスのエスプリをおもたに—

日時：11月7日(金) 開演午後6:30、閉演午後7:00
場所：オトセピア・ホール



脇 脇田大次

「真き企業市民を自覚して」

提供：藤彰彦、ラッキー自動車、東邦生命、長崎商工会、三菱重工長崎造船所、十八銀行、みづ銀行長崎支店、
協賛：長崎大経済学部「企業メセナ研究会」、
高田：みづ銀行、長崎県美術館、精華小学校、長崎大学経営学部付属美術館、
協力：長崎目仏協会、
後援：長崎県、長崎市、地域教育委員会、長崎経済同友会、長崎商連連盟、長崎新聞社、西日本新聞社長崎支店、朝日新聞社長崎支店、毎日新聞社長崎支店、読売新聞社長崎支店、日本経済新聞社長崎支店、NKK 長崎放送局、NHK長崎放送、KTN テレビ長崎、NCS 長崎文化放送、NHK長崎放送局、長崎ケーブルメディア。

演奏会が目指すもの：

「ライブアヒスをした音楽家（パット・メッツァー）の精神に従い、各者はパリを
中心に活躍したフランスゆかりの作曲家たちをも取り上げて、観客が楽しい音楽をぜひ長崎
でも味わって頂きたいと思っております。

フランスといえばまず思い浮かべられるのはやはり莫札、パリ。日本からも数多くの
著名な作曲家が、フランク、スメター、あるいはバルビエやドビュッシー、美しさを醸成して
いる方が多いと思います。

音楽の分野でも古くは18世紀前半にはフランス・バロックといって、ドクの大調、バ
ッハと同様ですが、もっと自由で展開しだしたロココ様式といわれる豪華な様式が栄えま
した。その後の音楽の進歩はドクに譲られた感があります。パリでは18世紀後半の上
流階級の中でビュッシーが天才を現し、前「道徳的狂言（狂歌集）」について、音楽の教育
のミレー、ムノワールとも関わりが深い作曲家、ラヴェルクがドビュッシーが活躍し、パリ
はまさに音楽の都としてヨーロッパの中心でした。

そこで、今回はフランスゆかりの様々な作曲家のヴァイオリン、ピアノの曲を取り上げ、
その小さなアピアをなまなまに楽しんでもいただきたいと思います。演奏する曲はすべて
筆者が、また長崎の文化・社会ともつながり、音楽の発展を促進できる作品です。
(大室英子)

長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」

「企業メセナ」(企業による国・地域に対する支援活動)について多面的・実践的研究のため
に、長崎大学経済学部の研究者を中心として平成18年に結成された組織。研究者による研究
発表や社会が代表的企業メセナ活動推進者による実践活動などの研究を行っている。
研究の中心はメセナの発展を促進するための実践的なメセナ活動にも取り組んでおり、その
成果は「企業メセナ」をすすめるための企業メセナの発展に貢献し、活動として実践は専
門に発行予定。お問い合わせは、代表理事である長崎大学経営教授 菅原直樹へ(〒852-8580長崎
県NTS.095-8303の334まで)。

Program

— ピアノとヴァイオリンで贈るフランス音楽のタベ —

ピアノ独奏：大室英子

- 1. ドビュッシー：月の光。
2. ショパン：ワルツ Op. 34-1, 2, 3。
幻想ポロネーズ Op. 61。

..... 休 憩

- 3. フランク：ヴァイオリンソナタ

ヴァイオリン演奏：加藤桃子

- 第1楽章 Allegretto moderato
第2楽章 Allegro
第3楽章 Recitativo-Fantasia Moderato
第4楽章 Allegretto poco mosso

演奏者の詳細な経歴についてはチラシをご覧ください。

作曲者と曲目：

クロード・ドビュッシー (1862-1918)

フランスに生まれ、モネやリッセルら印象派の画家たちと交流し、音楽史上でも「印象派」
を代表する作曲家の一人。ドビュッシー、彼の名前はかならずの事であり、異国情緒あふれる音楽
は、まるで夢を覚えているような輝きにとられます。「月の光」は初期のピアノ曲「ベルガマ
ツク舞踏」の第3番目。個人から一人の静かなる音楽を聴かせるように、またに
月の光を輝かせるように、ドビュッシーの音楽の心で最も有名な曲の一つを聴かせる
でしょう。

フレデリック・ショパン (1810-1840)

ポーランドに生まれ、若くしてパリに渡り、地元の貴族と交際したショパンは、急逝した
花嫁への限りない情を捧げつつ、その魂をピアノ曲に注ぎました。作曲34の3つのワ
ルツは、それぞれ自身した時期は異なりますが、パリのサロンで最も有名な音楽を演奏するワ
ルツの「ワルツ」に譲られた作品となっています。3番目も「華麗なるワルツ」という題
名がつけられています。1番目は華やかで洗練されたワルツ、2番目は抒情的なワルツ、3番目は
めどるようなワルツで華麗なワルツ、とそれぞれ違った性格となっています。
作品目的の幻想ポロネーズは華麗なワルツの序奏にはじまり、やがてポーランドの雄偉な
舞踏のメロ「ポロネーズ」のリズムに乗って「歌を聴かせる」ことができます。自らの死を予感
し、作品に限りなく情が注がれたこの曲は、最後に輝かしい人間の尊厳を思いあけて幕を閉
じます。

セザール・フランク (1822-1890)

フランスは、64歳に生まれ、その一生を教会音楽で過ごして、終焉まで過ごし
ました。作曲家としてはかなりの期間をたどって生きていた。その先駆者は22歳の
1840年、彼が64歳の時の作品です。自然な感動にあらわれたこの曲は、「標準形式」とい
って、標準形式（メロディ、あるいは、そのメロディを伴うもの）が先奏を伴って後
を導きます。19世紀の音楽でも、自然な感動が、美しく展開している作品として、
よく演奏される曲です。
(大室英子)

(このプログラムに描かれた花の絵も、脇田氏によるものである)

このホールは500人収容の小ホールであるので、前述したプレイガイドでの出券数やスポンサー企業からの聴き取り調査から、収納人員を遙かに超える入場者が予想され、開場時間前にお客さんが並び初めた時は「どう対応しようか？」と心配をしたほどであった。しかし、この心配は残念ながら杞憂に終わった。入場者は300人未満であった。このホールの前半分は200人分の椅子を並べ、後ろ半分は300人の階段状の椅子席になっており、ほとんどの入場者は階段席に座ったのでほぼ満員であった。唯一の慰めは、このような座り方をすると音の響きが最も良いということであった。ただ、演奏者にはがら空きの椅子席がすぐ目に入るので、モチベーションがなかなか湧きにくかったのではないだろうかと思われる。

このホールでのコンサートの様子は、カメラの準備を忘れてしまったので、写真で見ることができないのが悔いに残っている。1回目から簡単なアンケート調査を行っているので、簡単に紹介する。回収枚数は40枚で13%強の回収率であった。

- ・企業メセナの認識率は、知っていた人が18名（45%）、知らなかった人は22名（55%）であった。
- ・企業メセナについての考え方については、圧倒的に35名（87.5%）が「企業は社会貢献として積極的にすべきである」と回答している。
- ・芸術活動を維持・発展させるためには、「民間団体を作って保護すべき」が14名（35%）、「政府が保護すべき」が13名（32.5%）、「企業が中心となって保護すべき」が10名（25%）と分かれた。
- ・長崎県の企業はメセナを行っているかどうかの認識については、「少しは行っている」が14名（35%）、あまり行っていないが11名（27.5%）、全く知らないが14名（35%）であった。
- ・長崎県の企業がメセナを行うべきかについては、「大に行うべきである」が18名（45%）、「余裕があれば行うべきであるが」16名（40%）、少しは行うべきであるが7名（17.5%）であった。

注7：長崎北公民館に設置されたホール。

4．総括その1（演奏者の視点から）

2008年大好きな長崎へ音楽のプレゼント第3弾

「フランスのエスプリをあなたに」を終えて

大室 晃子

長崎大学経済学部「企業メセナ研究会」主催の「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」シリーズも今回の2008年で3回目となり、菅家正瑞教授のご尽力の賜で大盛況のうちに終えることができました。振り返ってみると、シリーズ第1回目は、私がまだドイツ留学中であり、学生であった頃のこと、第2回目は、ドイツの大学院を修了し、ヨーロッパを中心に行っていた演奏活動を、帰国の準備をしながら日本へと拠点を移す時期であり、精神的にも不安で一杯だった頃のこと、そして今回は、帰国して1年が経ち、母校である東京藝術大学に非常勤講師として勤務しながら、母国日本で演奏家として本格的に歩み始めた時期でのこと…。まさに3回とも全く異なった環境のもとでのシリーズであり、私自身がこのシリーズと共に成長させていただいていることを強く実感しています。今回の第3回目は、前回に続き、長崎大学教育学部准教授でいらっしゃる加納暁子先生に共演していただいて、「フランスのエスプリをあなたに」という副題の示す通り、フランスゆかりの作曲家ドビュッシー、ラヴェル、フランクを中心にプログラムを組ませていただきました。東京藝術大学在学中に、「将来はパリに留学したい!」と憧れて、かなり本格的にフランス語に取り組んだ思い出がある私にとっては、菅家先生と相談しながら決めたこのプログラムは、本当に楽しみでもありました。結局、留学の地は、縁のあった南ドイツに落ち着いたものの、6年の留學生活の間に、演奏会やレッスン、または友人を訪ねて何度もパリを訪れ、憧れを裏切らない、それ以上の魅力にいつも酔いしれました。豪華絢爛なオペラ座があり、英雄ナポレオン廟、世界に名を轟かせるルーブル美術館、セーヌ川沿いに並ぶおしゃれなカフェ並木、パリの街を思うと今でも胸が躍る気持ちに

なります。そんなパリ、フランスのイメージというのは、日本でもミシュランが大きな話題にもなったように、ファッション、芸術文化、食文化など様々な分野において一般に浸透するところであり、今回はぜひそのような「粋＝エスプリ」を長崎の皆様演奏でお伝えしたい！と願って準備を進めました。今年初めて選んだ会場である「チトセピア」での本格的なコンサートの他に、アウトリーチコンサートとして、福祉施設みのり園、時津北小学校、長崎大学病院の3カ所と、恒例の県立美術館でのロビーコンサートの5カ所で演奏させていただき、今までにも増して充実した内容だったのではないかと自負しています。

前回の反省としては、一番に宣伝、集客の問題がありましたが、今回は「おくち」の日程を避けたこと、本格的なコンサートの前に行われたアウトリーチコンサートでケーブルテレビの収録や、長崎新聞の取材をしていただいて、事前に多くの方々へ情報が伝わったこともあり、最終日のチトセピアでの演奏会はたくさんの方々へ聴いていただくことができ、本当に嬉しく思いました。また、加納先生とは前回共演させて頂いた経験から、信頼のおける演奏家であることの安心感があり、難曲であるフランクのヴァイオリンソナタも出色の出来ではなかったか、と思います。また、今回取り上げたショパンのピアノソロの曲、ワルツや幻想ポロネーズは、このシリーズ直後に控えていた、東京でのリサイタルのプログラムの一部でもあり、この長崎での経験を経たことから、東京のリサイタルも好評のうちに終わらせて頂いたことも加えてご報告申し上げます。

演奏家は、練習の段階では作曲家や曲と心底向き合い、自分の能力、感性を総動員して、時に苦しみながら演奏する曲を仕上げていきますが、演奏会場で舞台上立つ以上は、聴いてくださる方とのコミュニケーションというのも大きな要素となります。これは、どんなに家にもこもって練習を重ねても身に付かない感覚であり、それ故、日本の若く才能ある多くの演奏家が演奏会経験の少なさにより、その才能をなかなか伸ばせないこともよく耳にする話

です。今回、偶然にも長崎の後、東京でのリサイタルの機会をいただいていた私は、「経験」というものが演奏の質を上げる上でどんなに大切なことを実感し、このシリーズに深く感謝したいと思いました。

アウトリーチコンサートは、第1回から続け、そしてその経験を生かして普段から経験させていただくようになったこともあり、ずいぶんスムーズに進められるようになったのではないかと、思います。思えば第1回時には、初めての「トーク」をしながら演奏をし、弾いているすぐ横を生放送のテレビカメラが横切る、そんな経験に緊張しっぱなしで反省しきり、という感じでした。やはり経験は大きいものです。そして、このような活動をライフワークにもされている加納先生のお話の進め方 声のトーンや、言葉の選び方などは本当に素晴らしく、私も共演させていただきながら多くを学びました。みのり園では、聴いてくださる様々な年齢の方々が、それぞれの感動を全身で表現してくださったことに感動しました。そして、毎年訪問している長崎大学病院は、今回リニューアル後初めて演奏させていただいたのですが、吹き抜けで開放的な空間の中、二階からも多くの方々に耳を傾けて頂き、病院の方々の献身的なサポートの中、美しい響きを紡ぎ出せたように思います。時津北小学校では、玄関に入った時から「ようこそ！」の歓迎の言葉や心配りをしていただき、素直な児童の前で、私自身も新鮮な気持ちになりながらのアウトリーチコンサートとなりました。一緒に給食を食べているときも様々な質問を受け、その素朴な問いかけに、こちらがはっとさせられることも多々ありました。

この「大好きな長崎へ音楽のプレゼント」シリーズも菅家先生のご退任と共に次回で一区切りとなると伺い、やっと軌道に乗り始めたところなので、少し寂しい気もします。毎年楽しみに聴きにいらしてくださる方も多く、また時津北小学校校長先生でいらっしゃる樽美寛先生のように、このシリーズを通してずっと見守り、協力してくださる方々とのご縁は今後ともぜひ大切に考えたいと思います。最後になりましたが、スポンサーとなっていただき

ました企業、団体の皆様、そして大変な企画をほぼ一人で進めて下さる菅家先生に心から御礼申し上げたいと思います。

5. 総括その2 (主催者の視点から)

この報告書を終えるに当たり、福砂屋の殿村代表取締役社長をはじめたくさんの方々にご尽力をいただき、大きな励みとなった。いちいち個人名を挙げることは差し控えさせて頂くが、この方々のご支援がなければ、このような「メセナ」活動は実行し得なかったであろう。ここに、関係者に深く感謝したい。ラッキー自動車の諸岡専務取締役には、本研究会解散後にメセナ活動を実施する組織作りの提案を受け、何とかできないものかと思惑している最中である。これについては長崎の若い経営者に大きな期待を寄せているものである。(注1, 2)

なお、最終回になる平成21年度についての計画はほぼ固まっている。ピアノは大室だが、長崎出身の東京で主にフリーで活躍しているヴァイオリニストの松川裕子氏を招き、11月中旬に旧香港上海銀行長崎支店跡記念館を中心に開催する予定である。テーマは最終回にふさわしく「ドイツ3大Bを弾く」で、12月には「長崎大学交響楽団」とベートーベンのピアノ協奏曲を弾く予定である。

注1：今回は、多くのメディアに後援して頂いたが、私が把握した限り、採り上げて頂いたのは、長崎新聞、長崎ケーブルメディア、西日本新聞社のみであった。

長崎新聞；「良質の音楽7企業が提供 メセナ研究会」(20.11.4.)

西日本新聞；「長大の研究会 『企業メセナ定着を』」(20.11.5.)

長崎ケーブルメディア；時津北小学校での演奏風景を放映 (20.11.6.)

注2：本メセナの実施あたって本研究会への寄付金は58万円、直接に出費した経費は、出演料、旅費、滞在費、調律費、チラシ印刷費など概算で70万円であった。不足分は私の研究費と研究会への寄付金で補填した。

以上